



甲第九五号証

前一字
加一字

平成四年(5)第五二号

控訴趣意補充書

右の者に対する傷害・準強姦被告事件について、弁護人は左記のとおり控訴趣意を補充する。

平成四年一月二二日

名古屋高等裁判所

金沢支部 御中

弁護士 木梨 松 嗣

被告人 廣野 秀樹

一 心神喪失・耗弱について

記

被告人は、精神的に未熟であり、思考の固執性・自己中心性を有する性格で



ある。また、被害妄想があったことから、他人の言動をより一層被害的に受け取り、極度の精神的興奮状態に陥ったことから本件犯行を惹起したものである。その犯行当時心神喪失又は心身耗弱の状態にあったものと言わざるをえない。

1 被告人の性格形成の要因

被告人は、幼い時に父を失い母一人・子一人として育ったこと、石川水産高校小木分校へ入学したが一年で中退していること、一六歳のときシンナーで家庭裁判所で試験観察の処分を受けていること、昭和六〇年一月頃に結婚（婚姻届出は昭和六一年一月二九日）しているが、当時被告人は二〇歳・妻一六歳と極めて若年であり、また、同一人と再婚・離婚を繰り返していること等（平成四年四月二日付被告人の員面調書）が被告人の性格形成の要因となっている。

2 被告人の性格

被告人は、精神的に未熟であり、思考の固執性・自己中心性的性格を有しており、特に女性に対し異常な思い込みをする性格である。

(一) 原審での、「(被告人は)強い者には下手に出る反面弱い者に対して言葉使いも乱暴な話し方をする。口数が少なく陰気で時々何を考えているのかと思うところがある」「俺は国のために働いている、車についているカーステレオで軍歌をボリウム一杯にあげる等、突然私共では理解に苦しむ様なところがある」(梅野博之の員面調書)、「何か早口で怒鳴りながら事務所のドアをけり破ったことがある」(池田宏美の員面調書)等の供述調書から、被告人の職場での異常性が推認しうる。

○ また、女性に対しても「(被告人が)二一歳位・相手の女性が一六歳位で結婚・成人女性の心を知らないまま結婚している」(梅野博之の員面調書)、「文さんの受け答えが明るかった事から秀樹が、文さんは自分に好意をもっていると思い込」んだ、「あの子、文ちゃんは自分の方からあまり



話し掛けなのに、俺に話し掛けてくるのは俺の事が好きなんでないか」
（池田宏美の員面調書）「広野さんは文ちゃんに対し異常と思える程の熱意で交際を迫っていた、普通ならあきらめるところを何度となくしつこく交際を迫り、何か変わった人だと思った」（多田敏明の員面調書）、「（文ちゃんは広野さんの事について）奥さんに逃げられた人で、時々、何を考えていて何をするか分からない怖い人だと言った」（北野奈美の員面調書）等の供述調書からも、被告人の思考の固執性・自己中心的性格が推認される。

（二）更に、被告人は控訴後弁護人に対し毎日手紙を書いてきており（これ自体で被告人の異常性が推認しうるものであるが）、その手紙の内容は依然として被告人が被害者から好意を持たれていたことを確信している内容である。一例をあげれば「この事件は、私が直接行動をもって不信を貫き彼女とはとぼけ通すことにより誠を貫いた」（手紙番号一三）等々。

3

被害妄想

被告人は、前述の性格により被害者が被告人に好意を持ち、互いに相思相愛の仲であると思い込んでいたところ、二人の仲を邪魔するのは会社の人間であるとの妄想を抱くに至った。

このことは、被告人が当職宛の手紙で安田敏への不信感をくり返し、かつ「三人組は絶対に挑発行動に加担していた。彼女は、三人組より指示指導を受け、奇怪なる行動（裏駐車場の一件）を三人組の指揮により行い、そして三人組の裏切りにより、その負担と不信を一身に背負わされてしまった」（手紙番号二七四）「彼女に対する不信感是她女がまったく気づかぬところで三人組がつくりあげたものであり、事件当日、池田さんの不安はそのことの発覚を恐れたことである」（手紙番号二八一）等と記述していることから明らかである。

4

被告人の犯行動機について

(一) 被告人は前述のような被害妄想が嵩じて本件犯行に及んだものであるが、その動機は「事件は単なる立腹・制裁でなく、誠意ある話し合いを強く求めたのであり、」(手紙番号八)「私が直接行動をもって不信を貫き、彼女はとぼけ通すことにより誠を貫いた」(手紙番号一三)として、「私の人間不信被害妄想が彼女の言動と共鳴することにより、私は、真剣に自分の精神状態に不安を抱き非常手段をもってまで彼女に真実を求めた」(手紙番号二二)ものとしている。また、セックスの点については「彼女的意思を確認する手段」であって(手紙番号八三)「体の結びつきを行っていないければ彼女はあまりの悲しみのあまり生きる氣力をなくしてしまっていたように思える」(手紙番号二九〇)として、性的欲求から出たものではないとしている。

□ したがって、被告人の本件犯行の動機は被害妄想から、被害者と被告人とが相思相愛であることの確認を求めたものである。

5 本件犯行時の状況等

(一) 被告人は、裏駐車場の件について、会社とグルと思い込み「会社の人に頼まれ会社のために私とつき合ってきたのか」と思いさらに逆上した（手紙番号一九七）。

被告人としてはそれ程強い暴行を加えたことは認識しておらず、「極度の興奮状態であったためなのか、罪悪感のためなのかわからない」（手紙番号二〇一）が、被害者の症状を全く自覚していない状態であった。

(二) したがって、犯行当時被告人は極度の興奮状態に陥っており、犯行に追いついて立てられたものと考えられる。

6 以上により、被告人は本件犯行当時心神喪失又は心神耗弱の状態にあったものといわざるをえない。

二 控訴審において主張するに至った事由

被告人は、当職が当審において弁護人に選任されて以来毎日手紙を送付して

おり、その手紙の内容から、被告人が犯行当時心神喪失又は心神耗弱状態であることが判明したものである。

三 精神鑑定を求める理由

1 被告人は、当審において準強姦を否認している。被告人は、手紙で「彼女の意思を確認する非常手段としての行動であった」「事件当日、貞操をもって私に詫びを入れに来たのかと思った。彼女は私の答いかけに即答しており、精神異常は思えなかった。彼女は私の接吻を受け入れた。かすかに舌をからませた。恋愛意志の確認をもって、彼女は私の愛を受け入れてくれた。相思相愛の結合である。」（手紙番号八三・八四）「あの時、体の結びつきを行っていないければ、彼女はあまりの悲しみのあまり生きる氣力をなくしてしまっていたように思える」（手紙番号二九〇）と述べている。

2 したがって、当時の被告人の精神状態を明らかにすることにより、被告人に強姦の故意がなかったこと、及び前記の犯行当時心神喪失又は心神耗弱状



3 態であつたことを立証するものである。
よつて、精神鑑定の採用を求める。

